

(様式 1)

令和5・6・7年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(3年次)【小学校】

【学校名等】

学校名	綾部市立中筋小学校							校長名	村上 稔
学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	児童数	229 名
学級数	2	2	2	1	1	2	2		
事業担当教員名	山村 知矢								
① 中学校区で目指す子ども像	ブロック教育目標 自立と貢献 ～夢をもち 仲間とともに 未来を切り拓く 子どもの育成～ ブロック 目指す子ども像 ※下線部太字…重点 夢をもち 仲間とともに 未来を切り拓く 綾中ブロックの子 ・夢をもち（将来を見据え、主体的に学び表現する子）【展望する力】 ・仲間とともに（豊かな心を持ち、自他ともに大切にできる子）【つながる力】 ・未来を切り拓く（心身ともに健康で、実践力と行動力のある子）【挑戦する力】 ・綾中ブロックの子（誇りと郷土愛をもち、地域とかかわる子）【貢献する力】 1. 主体的に学び、課題解決に向けて最適な方法を選び、粘り強く取り組むことができる。 2. 他者と効果的にコミュニケーションを取り、対話を通じて自分の考えを伝え合う表現力（話す・聴く・考える）を身に付けている。 3. 自己理解を深め、夢や希望をもち、それらの実現に向けて行動することができる。								
② 目指す子ども像	【目指す子ども像 1】 学習の目的を理解し、主体的に学び、学んだことを生活に生かせる子ども 【目指す子ども像 2】 人とつながり、協働的かつ粘り強く問題を解決する子ども 【目指す子ども像 3】 人のために行動することに喜びを見出し、行動する子ども								
③ 目指す子ども像に対する現状と課題	【本校の児童の強み】 ・ 前向きな気持ちを持ち、素直で人懐っこい子どもらしさがある。 ・ 行事、誰かのために等、目標を持って協働的に頑張れる集団の風土がある。 ・ ICTなどを積極的に用いて、学習に取り入れることができる。 【本校の児童の課題】 ・ 集中して話を聞く力や粘り強さに課題がある。また、やる気が継続しにくい。 ・ 人任せや流されやすさ、規範意識の低さ、言葉遣いなどに課題があり、自分に甘い側面がある。								

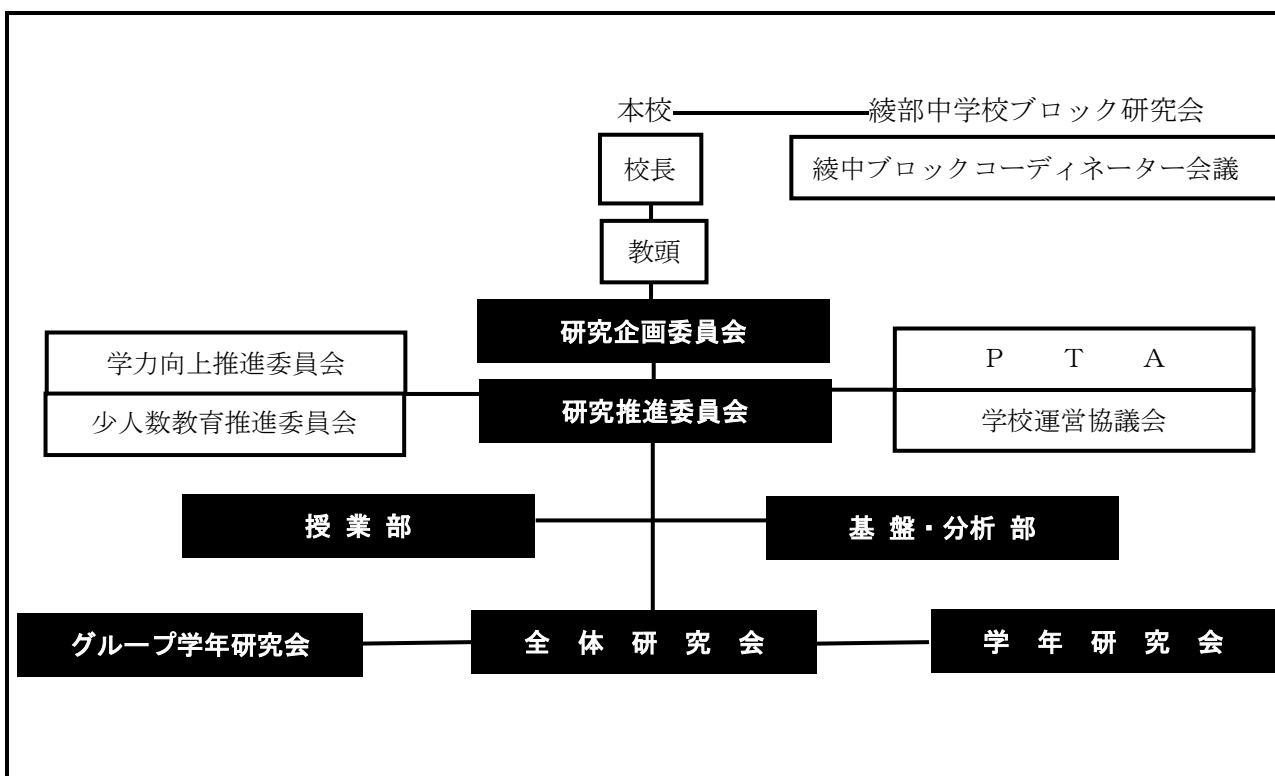
④ 目指す子ども像に達するための仮説	【研究仮説１】 学習する目的を理解したり学習の計画を考えたりして、学ぶことの必要性に気付かせることで、主体的に学び、学んだことを生活に生かせる子どもに育つのではないだろうか。 【研究仮説２】 友達と協働的に活動させたり、非認知能力への効果的な仕掛けを与えたりすることで、協働的に粘り強く問題を解決する子どもに育つのではないだろうか。 【研究仮説３】 人のために頑張れる児童実態を学習の目的にリンクさせ、達成感を味わわせることで、人のために行動することに喜びを見出し、また、その喜びを次への意欲につなげる子どもに育つのではないだろうか。
--------------------	--

令和７年５月１日現在

【１ 研究主題】

よし、やってみよう。 ～児童の心を動かす効果的な仕掛けを通して～
--

【２ 研究組織体制】



【3 具体的な取組内容】

- ・ 年に6回の授業研究会を実施し、児童実態を意識した単元構成について検討し、その効果を検証する。授業研究会の前にはグループ学年研究会と事前研究会を設け、単元構成や効果的な仕掛けについて協議を行う。また、授業後には観察した児童の様子に基づき、その効果について検討する。
- ・ 児童の実態を把握するツールとして、学びのパスポートや校内アンケートを活用し、教師の見取りとデータの両面から児童の実態把握に努める。
- ・ 研究授業の様子を児童や保護者向けにまとめ、廊下などに掲示することで、学校全体に実践を波及させ、研究主題に向けての機運を高める。
- ・ 外部講師の招致を行い、理論的な研修や研究の方向性について評価をしてもらう機会を作る。
- ・ 研究の成果や課題を検証するツールとして、学びのパスポートや校内アンケートを活用し、教師の見取りとデータの両面から研究活動の効果検証に努める。
- ・ 児童の自主学習の様子を表彰したり、粘り強く努力したモデルや効果的な学習となるよう工夫したモデルを掲示したりする。

【4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
4～6	33	目標を達成するためのよりよい方法をいつも考え、取り組み方を変えていっている。	自己調整	研究仮説1、2の検証
4～6	39	「不思議だな」、「もっと知りたいな」と思うことがよくある。	好奇心	研究仮説1の検証
4～6	41	人が困っているときは、進んで助けている。	他者と進んでかかわろうとする態度	研究仮説2の検証
4～6	48	難しいことでもあきらめなければ乗り越えることができる。	目標に向けて取り組む姿勢	研究仮説3の検証
4～6	59	普段の生活の中で、自分の考えを自由に話すことができる。	心理的安全性	学びの基盤として

* 5、6の分析項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法

- ・ 心理的安全性や自分らしさの発揮の項目に否定的な回答をしている児童に対しては、個別に声を掛けたり、孤立しがちな児童同士をグループ活動でつないでいったりして、心理的安全性を高めていくような学級経営を意識して行う。
- ・ 自己理解が不十分な児童や学年があるので、チャートなどを活用したり、視覚的に自己を見つめられるように支援をしたりして、自己理解の能力を向上させる。

集団としての具体的な指導・支援方法

- ・ 少人数学習のよさを生かし、一人一人が自分事として課題を捉え、自ら解決する力を育成する。また、自主学習などを推奨し、自己を調整する側面へ仕掛けを行う。(6年)
- ・ 単元の見通しを持たせる活動を今後も継続する。また、考えや思いをアウトプットするようにさせる。(5年)
- ・ 学校行事と教科学習を関連付けるなどして、児童の好奇心を学習活動への意欲や学力の定着につなげる。(4年)

【8 仮説の修正】

仮説の修正は特になし

【9 具体的な取組内容の修正】

追加

- ・ 行事や授業において、一人一人が自分事として課題を捉え、自ら解決する力を育成できることを意識して課題や行事に向かわせる。(6年)
- ・ 授業や家庭学習(条件作文)において、考えや思いをアウトプットするようにさせる。(5年)
- ・ 教科学習の目的をパフォーマンス課題という形で行事などに関連付け、児童の好奇心を学習活動への意欲や学力の定着につなげる。(4年)

※10、11 は、「実績報告書」として年度末に記載する。

【10 児童の変容(普段の様子から)】

○ 教師の見取りによる児童の変容の分析

【児童の変容】

- ・ 行事や授業において、個々にスポットライトがよく当たることで、“やるしかない”と感じている雰囲気が学級にあり、学びに向かう意欲が向上した。(6年)
- ・ 授業での学びを自主学習などにつなげる児童が増えた。(5年)
- ・ 「書く」ことについては、書いて表現する楽しさを感じる児童が多数おり、成果があった。(3年生)
- ・ 導入の時に興味を持たせることで、意欲を持ってできる子もあった。(2年生)
- ・ 1年生は日々、成長してできることが多くなった。「やってみたい」という気持ちが強いので、それを継続させることができた。(1年生)
- ・ 児童の興味や関心に合わせて指導方法を工夫できた。(おおぞら学級)

【教師の変容】

- ・ 一人一人の強みや課題をつかんで授業の内容を考えることを大事にできた。子どもたちだけでなく、自分自身もやってみようの精神でトライできた。(6年)
- ・ 授業研など、単元計画を計画的に考えたり児童の主体性を伸ばすための仕掛けを所々で入れたりすると児童の意欲につながった。(5年)
- ・ 導入で題名読みや問いを持つことなどに力を入れると、児童が興味を持ち、乗ってきた。自分から発表しにくい児童が多いため、こちらから指名をすることもあったが、できるだけたくさんの意見を引き出すことで学びあう楽しさを感じることもできた。(3年生)
- ・ 板書の工夫、導入の工夫により、興味を持って学習に取り組ませられた。(2年生)
- ・ 授業の振り返りをするときに何について書くのかはっきりさせることで学習への意欲、まとめ、理解力の把握ができた。(2年生)
- ・ 自分自身が「やってみよう！」という気持ちで様々な仕掛けを考えられた。国語科・算数科を主にどんな仕掛けができるかを考えて実践できた。(1年生)

- ・ 導入（単元・授業）を工夫することで「よし、やってみよう」という気持ちを持てるようにできた。（おおぞら学級）

【11 次年度の研究構想】

【成果】

- ・ 「やってみよう」という研究主題は教師にも児童にもわかりやすく、特に導入で何か仕掛けをやってみようと挑戦することにつながった。
- ・ 非認知能力の面で、子どもの意欲との関係を学ぶことができ、感情を意識した導入の大切さ、授業の流れについて分析し、学ぶことができた。
- ・ 授業参観の機会を通して、教師の学びが深まった。

【課題】

- ・ これまでの学年での学力の未定着がある児童は、新しい単元で学ぶ際に学びにくさが生まれたりして、表層的な理解にとどまるために、概念的には理解できておらず、長期的な記憶に結び付きにくい児童がいた。
- ・ 導入の動機付けだけでなく、学習を最後まで取り組める力がもっと必要であり、がんばる気持ちを持続できない児童には手立てが必要である。そのためには“全員参加”できたり、“分かりやすさ”があったりすることがよい。
- ・ 仕掛けを実行したが、その成果が出にくい学力 C 層の児童の課題があった。実態と仕掛けが結び付いていなかった可能性もある。
- ・ 「聞く」「発表」「反応」に課題がある。聞く力から育てたい。
- ・ 系統立てた授業のためには教科を絞るのもよい。

以上の成果と課題を踏まえ、次年度の研究構想として、

- ① 児童の実態や感情の動きを意識した授業の工夫
- ② 確かな学力の定着のための系統的な授業研究（教科の選定）
- ③ 教科学習だけでなく、学校行事や児童会活動を通して育むべき力（粘り強さ、意欲、主体性、聞く）を校内で共通確認し、学校全体で児童を育む。

R 5～R 7 までの研究活動を通して、自己調整学習や自由進度学習など個別最適な学びを実現するための新しい授業の在り方、児童の意欲や主体性を引き出す効果的な仕掛けのある授業の在り方についての研究を行ってきた。

一方で、基礎的基本的な学力の確かな定着、学校生活全体でどのような非認知能力をどのように育むかについては課題がある。

これらの課題を解決するために、これまでの研究実践の積み重ねを活かしながら、さらなる認知能力と非認知能力を一体的に育てていく。